
妖女

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖女

【Nコード】

N8044E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

謎の美少女姉小路清子。清純かつ妖艶な魅力を放つ彼女の正体は何か。そして彼女の目的は。アトラク「ナクアというゲームからヒントを得た作品です。

第一章

妖女

また随分と古風な外見の少女だった。

髪は黒のストレートで絹の様な美しさを見せていた。その黒髪を腰まで伸ばしている。髪は身体までを覆っていた。学校のセーラー服を端整に着こなしスカートは今時珍しく膝まである。肌は白く紙を思わせる。華奢な身体は思いの他長身でそのスラリとした姿を映えさせていた。細長い目は意外にも垂れ気味でありそれが微妙な違和感と印象を与えその美貌をさらに周囲に見せつけさせていた。そんな少女だった。

「紹介しよう」

担任の先生がここで皆に言う。彼女は今教壇の横で先生の側に立っていた。

「姉小路清子さんだ」

「はじめまして」

その彼女が挨拶をしてきた。表情を変えないまま低めの硬質の声で。皆に対して告げたのだった。その声は何処か上から下へ向けられている響きのするものだった。

「姉小路清子です」

自分でも名乗るのだった。

「これから宜しく御願います」

「姉小路君は京都からこちらに移ってきた」

京都育ちであるらしい。だが言葉にそちらの訛りはない。

「色々わからないこともあると思うから皆宜しくな」

最後に担任の先生が言う。それで朝のホームルームは終わりだった。清子はクラスの一員となった。彼女は抜群に頭がよくどんな問題も解くことができた。その為忽ちのうちにクラスでも有名人となったのだった。

「あのクラスの転校生よね」

「そうよ、あの娘よ」

他のクラスどころか学園全体でも評判となるのにも左程時間はかからなかった。彼女が歩けば必ず何処かでヒソヒソと彼女について話す面々が端に出る程だった。

「すつごく頭がいいそうよ」

「頭がいいだけじゃないわよね」

噂になるのはそれだけではなかった。

「奇麗よね」

「そうね。まるでお人形さんみたい」

こう言われるのも常だった。その美貌も噂になっていたのだ。

「この世のものじゃないっていうか」

「何かね」

「特にあれよね」

ここで彼女のある部分が話される。

「あの目が」

「垂れ目よね」

「その垂れ目がいいのよ」

目について最も話されるのだった。どちらかといえば頭よりそちらがであった。

「普通ああした顔の人って吊り目じゃない」

「ええ」

おおむねという感じでだ。確かに清子の様な外見ならば目は狐の様な感じであることが多い。実際に彼女の印象は狐を思わせるものがあつた。

「けれどその中で」

「あの目はやっぱりないわよね」

「そうなのよ、そこなのよ」

話されるのはその『ない』ということについてだ。

「普通はあんな顔にはならないのに」

「けれどそれが余計にね。いいわよね」

「この世のものじゃないみたい」

それが余計になのであった。切り揃えられた前髪と流麗な眉の下にあるその目がだった。垂れ気味でそれに目をやるとすぐにその黒い、琥珀色の輝きを放つ瞳に見せられる。穏やかでそれでいて離さないような光を放つその瞳に。誰が魅入られるのだ。

「女の子なのに」

「同性なのに」

これは学校の女生徒達の言葉だ。

「好きになつてしまえそう」

「このままね」

「付き合えないかしら」

その中の一人がふと言った。

「姉小路さんと。どうなのかしら」

「女の子でしょ」

周りもそれを言う。当然と言えば当然の突っ込みだった。

「無理に決まってるじゃない」

「けれどもよ」

それでもその少女は言うのだった。諦めきれないような顔で。

「それでも。告白してみようかしら」

「じゃあしてみたら？」

「法律じゃ禁止されていないんだし」

それは事実だった。日本においては同性愛は法律では全く禁止されていなのである。それどころが我が国は歴史のうえにおいても同性愛者がそれを理由として公で批判されたり逮捕された者のいない国なのだ。織田信長がそれで批判されたことも一度もない。これが日本の文化なのだ。

「そんなに言うのならね」

「わかったわ」

この突き放しがかえって彼女を後押ししたのだった。

「それじゃあ。行ってみるわ」

「告白するのね」

「ええ」

意を決した顔で頷くのだった。

「チャレンジしてみるわ」

「そこまで言うのならやりなさい」

「応援はするわ」

突き放してはいるがそれでもこう言うのだった。

「頑張つてね」

「わかったわ」

こうして彼女はまずは清子に声をかけた。精一杯の勇気を振り絞つて。

「話があるの」

「・・・・・・ええ」

同級生なのでタメ口だ。しかしそれでも緊張は隠せずその顔は真っ赤で表情も強張っていた。その顔で必死に彼女に告げたのである。

「放課後にね。場所は」

「何処なの？」

「体育館の裏側」

そこなら人はいないからだった。実はこの学校のそうしたスポーツでもあるのだ。

「そこに来て。いいかしら」

言いながら視線はじつと上の方だった。清子の反応を窺っているのである。

「それで」

「ええ」

そして清子もそれに応えた。頷きはしないが言葉で頷くのだった。

「わかったわ。じゃあそこで」

「・・・・・・いいのね？」

もう一度清子に問う。上目で。

「それで。いいかしら」

「いいわ」

また答えた。答えに変わりはないかった。

「それでね。じゃあ放課後にね」

「え、ええ」

清子の方から言われたので逆に戸惑いを覚える。しかし何とかそれを隠して応えるのだった。

「御願い。その時に」

「わかったわ」

清子は彼女のその言葉に頷いた。こうして放課後にその体育館裏で告白することになった。その放課後。体育館裏は至って静かであった。

第二章

そこにいたのは彼女だけだった。清子はまだいない。胸を押さえながら死にそうな顔で清子を待っているのだった。

「そろそろかしら」

その中でふと呟くのだった。

「来るのは……あつ」

呟いてからすぐだった。向こう側からその清子が姿を現わした。音もなく静かに彼女の前にやって来たのだった。まるで風のように。

「もう来ていたのね」

「え、ええ」

清子の言葉に頷く。だがその顔はもう真っ赤だ。

「そうだったのよ。早く来過ぎて」

「どうしてなの？」

「どうしても。気が逸って」

それを抑えきれなかったのだ。彼女自身が言うようにどうしてもだ。

「それでだったのよ」

「そうだったの」

彼女の言葉を聞いて応えるのだった。

「それでなのね」

「ええ。それでね」

あらためて清子に対して言ってきた。その顔を真っ赤にさせたまま。

「同じ女の子に対して言うのは何だけれど」

「どうしたの？」

「好きって言ったら駄目かしら」

清子を見詰めて問う。

「それは。こんなのって」

「そうね」

ここで清子は。じつと彼女の顔を見るのだった。特にその目を。

「答えはね」

「ええ。答えは」

「・・・・・・来て」

こう言っのだった。

「私のところに」

「私のところに」

その言葉が虚ろなものになっていた。顔もまた。人形の様になっ
てきていた。

「来るのよ。それが答えよ」

「・・・・・・わかったわ」

清子の言葉に頷くのだった。言葉だけで。見ればその目の光が消
えていた。それまで眩く輝いていたのが消えて。やはり人形のそれ
に近くなっていた。

「それじゃあ」

清子に自分から歩み寄る。しかしその足の動きもまた虚ろなもの
だった。その虚ろな足の動きで自分のところに来た彼女の両肩を両
手で抱き止めて。それから姿を消したのだった。

翌日彼女は自分の教室でクラスメイト達と話していた。前に清子
のことを話した面々だ。

「それであんた」

その中の一人が彼女に声をかけてきた。

「昨日はどうだったの？」

「どうだったのって？」

「だから。姉小路さんのことよ」

「どうなったのよ」

それを彼女に対して聞くのだった。皆で。

「告白したんでしょ？」

「それでどうなったのよ」

「あ、ああ」

それを聞いて思い出したように声をあげるのだった。

「そうだったわね」

「そうだったのって」

「それでどうしたの？」

「したわ」

こう言うが何故かその首を少し捻るのだった。

「体育館裏でね。それはね」

「したのね」

「ええ」

一応は答える。

「けれど」

「けれど。どうしたのよ」

「何があつたの？」

「覚えてないの」

答えはこうであつた。

「気付いたら家のベッドの中にいて。お母さんも昨日は遅かつたね
つて言っただけで」

「何もなかったの？」

「振られたの？」

「さあ」

周りからこう問われても首を傾げるだけだった。本人であるとい
うのにだ。

「どうなったのかしら」

「自分でそんなこと言っでどうするのよ」

「告白したのはあんたでしょ」

皆彼女のその要領を得ない言葉を聞いてそれぞれ突っ込みを入れ
るのだった。話を聞く彼女達もまた話がわからなくなっていたのだ
った。

第三章

「そのあんたがそんなこと言って」

「こつちが知りたいのよ」

「だからどうなったのかわからないのよ」

それでも彼女の返答はこうなのだった。やはりわかっていないのだ。

「体育館裏で姉小路さんと出会って。けれど」

「けれど？どうしたの？」

「何だろう」

ここでふと不思議な感触が残っていることに気付いたのだ。

「この感触。不思議なのよ」

「不思議？」

「ええ」

また答える。

「満足してるの。何もわかっていないのに」

「それはまたおかしいわね」

「どうしてかしら」

「だから。それもわからないの」

返事はここでも要領を得ないものだった。話すその顔もまた同じく要領を得ていない。

「どうしてなのかしらね」

「おかしい話ね」

「本当ね」

彼女に関してはこうだった。そしてそれは状況が異なり男でもそうだった。やはり告白しその次の日には告白したその相手は要領を得ていない顔になっている。それでいて心は満足しているというそんな矛盾した状況だったのだ。そしてそれを誰も不思議意思わないのだった。

その不思議に思わない中で。街で所謂柄の悪い連中が清子に目をつけた。学校の帰り道で待ち伏せしたうえで彼女をつけ狙い人氣がなくなったところで取り囲んだのだった。場所は公園の前だった。寂れた、しかも深い森のある公園だった。襲うには絶好の場所だった。

しかし清子はそのにいても表情を変えない。逆にその連中に対して問うのであった。

「何なのかしら」

「わかつてるよな」

「楽しませてもらうぜ」

彼等は下卑た笑いを浮かべて清子に対して言うのだった。

「さあ、わかつたら来るんだ」

中の一人が公園の森の方を指差して言った。もう一方の手には得物がある。アメリカ映画で三下が持っているような、そんな得物だった。他の面々も同じものを持っている。

「下手に暴れても無駄だぜ」

「女が一人でどうこうできるものじゃないぜ」

「そうなの」

すこまれても態度は変わらないのだった。

「無駄なのね」

「わかつたら来いよ」

「いいな、こつちだ」

また森を指差す。

「相手をしてやるからよ」

「いいな」

「わかつたわ」

意外なことというか信じられないことに。彼女もまたそれに頷くのだった。

「森の中ね。丁度いいわ」

「何だ、物分りがいいじゃねえか」

「だったら早くよ」

「誰もいないから」

不意にこう呟いた清子だった。

「お腹も空いたし」

「お腹!？」

「何言つてんだこいつ」

「まあいいじゃねえか」

彼等は深く考えなかった。元々考える頭がないからこそ清子に声をかけたのだが。彼女が森を出たのは一人だけであった。その唇に満足させたものすら浮かべていた。その後この不良達を見た者はいなかった。親達が捜しても何処にも見つかりはしなかったのだ。奇怪なことに。

このことはすぐに清子が今いる学校でも噂になった。皆怪訝な顔で言い合う。

「何人も一度にか」

「何処に行ったのかさえわからないそうよ」

そう噂するのだった。

「何処に消えたのかさえね。わからないそうよ」

「まあいいんじゃないのか？」

だが元々評判の悪い連中なのでこう結論付けられるのだった。

「あんな連中。いない方がね」

「それもそうね」

「そうだね」

彼等の出した結論はこうなるのだった。

「どっちにしろ街が奇麗になったよ」

「害虫がいなくなったただけなのね」

「害虫ね」

それを聞いて清子は呟くのだった。

「そつえば。蜘蛛は害虫を食べるものだったわね」

「?姉小路さん」

隣と一緒に歩いていたクラスメイトの一人が今の清子の言葉にふと顔を向けた。

「今何て」

「何でもないわ」

だが彼女はこう言葉を返して打ち消すだけだった。

「別にね」

「そうなの。それじゃあいいわ」

「ええ」

それから彼女に言い寄る男女は多かったが告白してからのことを思い出す人間はいなかった。それがどうしてなのかさえわからない。しかも清子について悪感情を抱くこともない。これもまた不思議なことであった。

その不思議な輪、いや網の中に彼女はいた。だが彼女はその中央から一步も動かないのだった。まるでそこでいつも待っているかのようにだった。

今日もまた清子に告白する者がいた。それは近くの学校の中学生だった。

「あの、姉小路清子さんですよね」

「そうだと言ったら？」

登校中だった。通学路で声をかけられたのだ。

「どうするのかしら」

「そ、それは」

清子に問われておどおどしだす。見ればまだ初々しい顔をしていて女の子の様にきめ細かな肌をしている。まだ華奢で小さい身体を学生服で包んでいる。そんな少年だった。

「一つ御聞きたいことがあります」

「聞きたいことがあってここに来たのかしら」

「それはその」

それを問われてまたおどおどしだす。清子はこちらからっているつもりはなかったがそれでも彼女は少年を弄ぶようなやり取りをしてい

た。

「あれなんです」

「あれ？」

「まず御聞きしたいんです」

勇気を振り絞るようにして清子に言ってきた。

「姉小路清子さん」

「ええ」

フルネームを言ってきたのだった。

「今、お付き合いしている人はおられますか」

「お付き合いしている人？」

「はい」

泣きそうな顔で清子に問う。

「おられますか。そういう人は」

「夫……いえ」

何故かここで夫と言うのが謎だった。

第四章

「恋人のことね」

「そうです」

そうなのだった。それを清子に問うのだった。

「おられますか？そういう人は」

「特にいないわね」

答えはこうだった。

「今はね」

「そうですか」

少年は清子のその言葉を聞いてまずはほっとするのだった。

「それはよかったです」

「よかったの？」

表情を変えず少年に尋ねた。

「それで」

「はい。よかったら」

さつきよりさらに勇気を振り絞って言ってきた。

「僕と。その」

「恋人になりたいのかしら」

「は……はい」

清子の問いにくくりと頷いてきた。

「いけませんか。僕では、その」

「今は時間がないわ」

即答せずにこう述べる清子だった。

「また時間がある時に来て」

「時間がある時にですか」

「放課後にでも」

放課後というのだった。彼女がいつも時間を指定されるその時間だ。今度は自分からその時間を指し示したのであった。少年に対し

て。

「また来て。いいかしら」

「は、はい」

少年は今にも割れそうな顔で清子のその言葉に頷くのだった。

「わかりました。それじゃあ今日の放課後に」

「場所は何処なのかしら」

今度は場所を尋ねた。それは自分では指定しなかった。

「場所ですか」

「何処がいいのかしら」

「ええと」

実はそこまで考えてはいなかったのだ。考えられなかったのだ。

清子に声をかけるそのことだけでも必死だったからだ。

どうしても言えない。言葉が出ない。しかしここで清子の目が赤く光った。その赤い光が少年の目の中に入ったその瞬間に。目が虚ろになり話すのだった。

「まずは学校の校門のところで」

「私の学校ね」

「そうです」

目は虚ろだったがその言葉はさつきよりもしつかりとしている程だった。その言葉を受けながら清子はその赤い光を消して元の黒い瞳に戻っていた。

「そこで御願います」

「わかったわ。また放課後にね」

「はい」

清子の言葉にそのまま頷く。

「会いましょう」

「わかりました」

こうやり取りをしてから二人は別れた。そしてその日の放課後。清子が下校に校門の前にやって来るとそこにはもうあの少年がいるのだった。

「早いわね」

「急いで来ました」

見れば肩で息をしている。全速で走ってここまで来て今やっと辿り着いたらしい。

「遅れたらいけないと思って」

「真面目ね」

そんな彼を見ての一言だった。

「それですね」

「ここでは言わないで」

校門での告白はさせなかった。

「駄目ですか」

「人がいるわ」

見れば二人の周りには多くの生徒達がいる。下校する者もいれば今から部活という者もいる。どちらにしる辺りには人が大勢いた。

彼女はそれを少年に言葉で示したのだ。

第五章

「だから。ここでは駄目よ」

「わかりました」

清子に言われるままそれに従う少年だった。

「じゃあ。ええと」

「いい場所を知っているわ」

今度は清子から場所を指定してきたのだった。

「いい場所ですか」

「そうよ。そこで詳しいことをお話しましょう」

目を覗き込みながら語る。少年のその色が虚ろになってしまった目をだ。その目をじっと覗き込みながらの言葉であった。

「それで。いいかしら」

「・・・・・・はい」

声まで虚ろになっていた。その虚ろな声で答える。

「それで御願います」

「わかったわ。それじゃあ」

また目を覗き込み。語る言葉は。

「来て」

一言だった。その一言に誘われて少年もふらふらとその場を後にする。清子と共に連れて来られたのは学校の近くの神社であった。

その神社の境内に二人で入りそれから。さらにその社の中に入り戸を閉めてしまったのだった。

「これでいいわ」

清子は戸を後ろ手で止めてから述べた。戸が閉められてから後ろに差し込む微かな光を背に言葉を出すのだった。

「これでね」

「あの、どうしてここに」

「二人きりになる為よ」

前に立っている少年に対して述べる。彼はここでもおどおどしている。

「二人きりにね」

「けれどここは」

「駄目だっというの？」

「ここで。何をするんですか？」

それが不安だったのだ。知らないということは何よりも不安を増大させるものだから。その心の中にある不安を。彼はその不安の中で怯えていたのだ。

「僕達は」

「安心して。命は取らないわ」

「命・・・・・・・・」

「普通はね」

こう少年に対して語るのだ。姿勢はそのままですつと一歩前に出ていた。

「命は取らないわ」

「命って、一体」

「貴方はこれからのことを覚えてはいない」
不意に出た言葉だった。清子の口から。

「決してね。そして思い出すことはないのよ」

「決して・・・・・・・・ですか」

「そう」

彼の言葉に頷いてみせる。その間にもまた一歩前に出ていた。しかしその足は動かない。まるでその場にそのまま立っていたかのように進んでいたのだ。

「決してね。だから教えてあげる」

「何を・・・・・・・・」

「私のことを」

その言葉を出した時にはもう彼のすぐ目の前まで来ていた。やはりその目を覗き込んでいる。

「私は。もう長い間生きているのよ」

「長い間!？」

「そう。気の遠くなるような間を」

言葉は続く。澄んだ声だがそこにはえも言われる妖しいものもあった。その妖しさを済んだ声に含ませながら言葉が続けるのであった。

「生きていたのよ。私は」

「どれだけの歳月を」

「さあ」

その言葉には答えない。答えられないのであろうか。

「わからないわ。それは」

「わからないって」

「どれだけね。平安の都にいた時も」

遥かな昔のことだった。

「その都が出来た時も。憶えているけれど」

「それでも。何時生まれかかは」

「憶えてはいないわ。それだけの歳月を生きているのよ」

「じゃあ貴女は」

「ええ」

彼の言葉に頷く。静かに。

「そうよ。人ではない」

「人じゃない……」

「人の世にある人ならざるもの」

目が赤くなっていた。赤く輝く目で彼を見ていた。

「それが私なのよ」

「貴女が……」

「そして」

その言葉と共に足の下から何かが出て来た。靴から生じたそれは忽ちのうちに八方に広がり網を作った。白い、絹に似た糸の網だった。

「私は人を食べるわ。けれどそれは」

「僕じゃない」

「いつもはそうなのよ」

「いつもは、と言った。」

「いつもはね。ただ無粋な輩には違うわ」

「無粋な輩って」

「消えた不良達がいたわね」

噂になった失踪した不良達だ。彼等が消えた理由はそこにあったのだ。今他ならぬ彼女の口からそのことを語るのだった。

「あれよ。ああした輩は生きていて仕方がないから」

「それで」

「食べたのよ」

今度は一言だった。

「それだけよ」

「それだけって……」

「生きていても仕方のない輩はいるわ」

澄んでいるが冷徹な言葉を口にした。まるで氷の様な。

「だから。食べたのよ」

「食べた……人を」

「安心して。普通の人は食べないのよ」

また語る。少年の耳にはなく心に語り掛けるように。語るのだった。

「貴方もね。それはさつきも言ってたわね」

「……はい」

「全てを忘れて。全てを思い出さずに」

さらに少年に近付き彼を抱き締め。それからその首筋に接吻をして囁く。

「楽しみましょう」

翌日彼は清子に告白したことを囁かれたがそのことは全く憶えてはいなかった。まるで幽玄の世界にいたかの様にぼうつとしている

だけだった。そんな彼女に対して皆首を傾げるだけだった。しかし本当に何も憶えてはいないので何を語っても無駄なのだった。どうしても思い出さないのだった。

その数日後にはまた清子に声をかける者がいた。今度は彼女の通っている学校の教師だった。まだ赴任したての独身の女教師だ。初々しさの残る美しい女だ。

「あの、姉小路さん」

「はい」

廊下で声をかけられた。それで顔を彼女に向けた。

「何でしょうか」

「今日ね」

冷静さを装い教師としての仮面を被っているがその肌は上気していた。彼女に対してどういった感情を抱いているのかそれでわかる。

「時間あるかしら」

「何時ですか？」

「放課後だけれど。ちょっと聞きたいことがあって」

こうは言い繕っているがそれは言い繕いに過ぎない。その心は別なのだった。

「いいかしら」

答えるその一瞬前に。唇が微かに笑った。ほんの一瞬だけ。

「はい。場所は」

それを尋ねる。そして次の日また記憶をなくした美女がいるのだ。それからそのことを。永遠に。

妖女 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8044e/>

妖女

2010年10月8日15時33分発行